

資質・能力の育成を目指した授業作り

—都立青梅総合高等学校「ハングル」3年間の事例—

石黒 みのり(都立青梅総合高等学校)

1. はじめに

都立青梅総合高等学校は、2019年度から文部科学省委託事業である「グローバル化に対応した外国語教育拠点事業」の研究拠点校となり、発表者の担当する「ハングル」(韓国語:初級、自由選択科目)はこれまでの3年間(2020年度は慶応義塾大学外国語教育研究センターが事業を引き継ぎ、2021年度は文部科学省委託事業「教員養成機関等との連携による専門人材育成・確保事業(グローバル化に対応した外国語教育推進事業)」としてプロジェクトを継続中)、新学習指導要領が掲げる「資質・能力」の育成を中心とした、パフォーマンス評価を取り入れた授業づくりについて研究してきた。研究主題としては「逆向き設計」に基づき、パフォーマンス課題を取り入れた単元指導案及び年間指導計画を作成及び実践する。また年間・単元目標を資質・能力の視点から明確化することにより、より効果的な資質・能力の育成をめざすものである。本発表ではその3年間の授業事例について報告する。

2. 概要

1年目(2019年度)は「青梅総合高校高等学校の校内を韓国語で案内できるようになる」という課題を設定し、研究授業を実施した。課題を自分たちの学校を舞台に設定にしたことで、「班で話す内容を決めるのが楽しかった」という生徒のコメントや「生徒は実際の場面を想定し、グループごとに案内文を作成することができていた」という、授業観察者の評価を得られた。しかし、他人の発表を「聞く」力と「話す(やり取り)」力の不十分さ、口頭での練習、発音確認等をもう少し丁寧にする時間が必要だという課題が残った。

2年目(2020年度)は「青梅総合高等学校を紹介しよう」と題し、動画(オンデマンド)で自分が通っている学校を、グループで5分以内で韓国語で紹介する課題を設け、授業を実施した。動画を全体で共有後、昨年課題だった「話す(やり取り)」力を強化するため、クラス全体で韓国語で質問をやりとりする課題を設定した。その結果、生徒の感想からも学習した文法や語彙を積極的に利用し、クラス全体でやりとりするという年間目標が達成された実感が得られた。年間目標を意識し、年間目標を達成するために授業で何をすべきかを考えることができ、無駄を省けた。学生を評価するための期末試験を、パフォーマンス課題のためのインプットとして位置付け、その内容を実際にパフォーマンス課題でアウトプットさせるという流れができた。

そして3年目(2021年度)は「青梅総合高等学校をオンデマンドで紹介しよう」という課題を設定し実施する予定だったが、コロナ渦による日程変更の影響により実施できず、急遽「皆に好きなことを自由に質問してみよう」という内容に変更した。各グループで質問1問ずつ考え、各グループ2つずつ答えるという形式で実施した。これまでの「話す(やり取り)」力の不十分さを考慮し、全体ですぐに共有せず、グループでまず練習をしてから全体に共有する方法に変更した。生徒からは「全体での質問大会が面白かった」「質問をグループで協力して考えることができた」「今後実際に使える表現を覚えることができた」との声から、「聞く」力及び「話す(やり取り)」力は以前よりも丁寧にできたのではないかと考える。

3. 今後の課題

これまで実際の場面を想定しオーセンシティのあるパフォーマンス課題を設定して取り組んできたが、今後はこの課題をルーブリックを用いてどのように評価していくかを検討しながら、授業実践に取り組みたい。